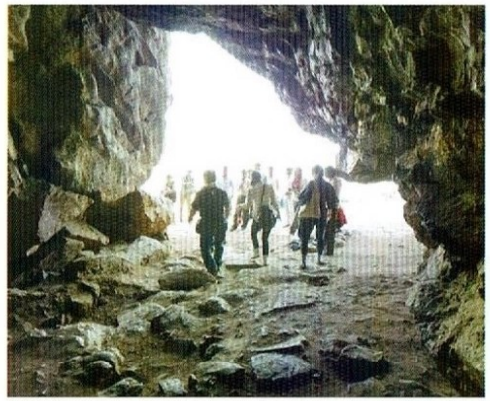
Namaste

お釈迦様のほほえみ 10

時宗布教伝道研究所所員　小田 義宗

さてここまではインド八大仏跡を紹介してきましたが、私が二週間のインド研修で訪れた町は二十ヶ所以上、そして遺跡に関しては四十ヶ所以上も参拝させていただきました。本当はそれら全てを紹介したいのですが、残念ながらそういう訳にもいきませんので、この号以降は八大仏跡以外で、特に感慨深かった町や史跡を紹介していきたいと思います。

それでは今回はお釈迦様が涅槃に入られた後まもなく、その「教え」を残していくために弟子たちが集まったとされる第一結集の地『七葉窟』のお話です。



まずこの『七葉窟』とは、前回紹介したラージギルという町を取り囲む五山の一つヴァイパーラ山の中腹（登山口から約一時間）にある洞窟のことです。そこからの眺めはとても素晴らしく、お釈迦さまもこの景色を愛でたかと思うと、今なおそばにお釈迦様がいらっしゃるような感じがしました。ちなみに、中国の五台山や京都の五山信仰などは、このラージギルの五山に依るのだそうです。そのような場所ですから如何にも仏教の大聖地の一つと言いたいところだったのですが、この洞窟は奥行十メートルほどで行き止り、しかも途中からは人がやっと通れるほどの広さしかありません。残念ながら、当時

五百名ほどの弟子たちが集まったとはとても思えないほど現在は規模が小さいものになっており、少し拍子抜けした感がありました。

しかしそのわりには、何故かこの山の登山口には早朝にもかかわらず多くの人出がありました。その理由はこの山を含めた先ほどの五山のいたる所に、仏教だけでなくヒンドゥー教やジャイナ教などの寺院や聖地が多数点在し、各地からやって来た各宗教の信者たちが、皆仲良くお互いの聖地を参拝しているからなのです。このように様々な宗教の霊場が重複していたり、さらには同じ建物内に異なる宗教が同居しているような場面を、研修中に他の場所で何度も見ることができました。一見おかしなことに思えるかもしれませんが、これはインド発祥の宗教には他のものを排斥しようとする性質がほとんど無く、昔から上手に共存してきた歴史がなせる業なのです。同じアジアでも宗教紛争の耐えない某地域とは雲泥の差と言えるでしょう。

ここ七葉窟では、インドからやって来た仏教と日本古来の神道が平和裏に融合した日本宗教史に納得することができ、インドで生まれた仏教の奥深さをしみじみと感じ取ることができました。

◆七葉窟の名の由来の植物

『インド 七葉樹』（左写真）

結集の際、窟の横には大きな七葉樹があったとされています。